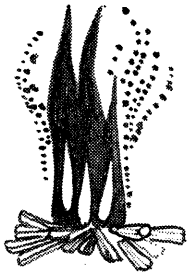
「伝記にみる人間形成物語」の執筆を終えて

西平直喜



1　母親の影響力の大きさ

私はこの五月に、お母さん方に読んでいただきたいと二冊の本を世に問いました。「伝記にみる人間形成物語」の第一巻「幼い日々にきいた心の詩(うた)」、第二巻「子どもが世界に出会う日」（有斐閣刊）の二冊です。

青少年問題を追っているうちに、お母さんたちに、人間というものをじっくり考え、とりわけ人格がどのように育ってゆくものかを正しく理解して欲しいし、生き生きと胸をはって生きていって欲しい、できることなら、日本全国の母親が腕を組んで立ちあがり、青少年育成の社会運動でもおこしてもらいたいくらいの気持になり、その手助けにと思いながら、この本を書き進めたのです。これから紹介する内容は、すべてこんな想いが背景にあって、その上に展開されていると思っていただきたいし、おひとりでも多くのお母さんに、人間が形づくられてゆく過程を知っていただきたいのです。余り「しつけ」とか「叱り方賞め方」という技術にとらわれずに、人間そのものをじっくり見つめていただきたいという考え

方ですから、心理学とともに哲学や宗教も入りこんできますし、夫婦のやりとりから遺伝と環境の問題まで扱います。「人間をその誕生から老衰まで、心や人格がどのように成長しどのように形成されていくか」を、伝記を材料にしながら物語っています。

このなかに「わるい母親以外はみんなよい母親である」といった節があり、当り前すぎて笑い出される方があるかもしれませんが、この表現のなかに、母親はなにも、よい母親になろうと気ばったり、ぜひこの子をA大学に入れようなどと力んだりせず、「暖く安らかで、のびやかでおだやかな」「ふっくらして自然で調和がとれた」「あるがままの柔軟な心をもった」女性だったら、赤ちゃんにはそれだけで十ぶんな母親だと言いたいのです。

たとえば赤ちゃんをもつとき、この自然さを欠いたお母さんは、どこかで子どもを傷つけます。徳富蘆花や坂口安吾、ビリ・ホリディやバルザック、リルケやオスカー・ワイルドのお母さんは、「もう欲しくない」「まだ欲しくなかった」「今度は女の子が欲しかった」などの心の動揺が、育て方に微妙なかげりを与えました。まして、夫婦仲が悪い場合や、私生児だったとか養子にやったとか環境の変化も影響しています。画家のダリ、舞踊家イサドラ・ダンカン、室生犀星、高見順、ストリンドベリ、モンローなど、ひとりひとりの心情は実に複雑です。

一方父親は、これまたいろいろの影響を与えますが、たとえば幼児期に子どもの手を引いて散歩した父親は、どんな影響を与えただろうか、石川啄木、ジョン・スチュアート・ミル、ボードレール、ヘルマン・ヘッセ、ジャンジャック・ルソーなどの伝記をさぐってみます。

更に少し変った散歩をしたキェルケゴール父子、ルイス・キャロルやアンドレ・ペラン父子の例、そして夫婦仲が悪かったり、父子の間に葛藤があったりしたジイド、コンラート・ロレンツ、アーネスト・シートンの例もあげて分析します。そして、なによりも三歳から五歳の子どもは、父から良心の基礎になる「超自我」を与えられます。そしてその超自我の在り方によって、子どもの倫理的な行動の型が決まってゆくのです。フロイト自身や、哲学者サルトルなどの例からその意味を考えますが、最後に、父を二歳で亡くした福沢諭吉と、厳格な父

にスパルタ教育を受けた内村鑑三の比較をとおして、良心の性質を追求します。この節は、「子どもの良心の両親は、両親の良心である」と名づけられているのですが、これもじっくり味わっていただきたい言葉です。

そして最後に、家族は生きた交互作用のなかで全体的な動きをする――家族ゲシュタルトをもっているということを説明しています。

「兄弟げんかは兄と弟のけんかに非ず」と言います。兄と弟のけんかでなくて誰とのけんかなのか？　実は必ずといってよいほど背後に母親への不満や憎しみが隠されているのです。徳富蘇峰・蘆花兄弟、フローベール兄弟、ジョルジュ・サンド姉妹、野口英世兄弟、内村鑑三兄弟から、シートン、ミル、ウィーナー兄弟まで、ことごとく、後ろに母親の偏愛や冷たさが見出されます。その反対に兄弟姉妹のこまやかな愛情を示した、グリム兄弟、吉田松陰、ヴィンセント・ゴッホ兄弟、ロマン・ロラン兄妹、などは、みんな実に良い母親をもっていることがわかります。

しかしここでも、良い母親とか悪い母親とか単純に割り切れないのは当然です。というのは、子どもが抱く両親の独占欲とか性愛的な愛情――エディプス・コンプレックスなどが、良い母親を憎ませたり、兄弟を嫉妬させたりするからです。この言葉を使い始めたフロイト自身も、ミルも、D・H・ロレンスもこのコンプレックスを表わしているのですが、従来は、母親の方が息子に愛着する傾向は余り重視されずにきました。しかし今は、むしろこの〈逆エディプス・コンプレックス〉と私が名づけた心情が、隠れた病原なのです。

今もなお絶えない嫁―姑の問題は、ほかならぬこの逆エディプス・コンプレックスによって悪化されてゆくものと言えるでしょう。「お母さん、あなたは息子さんが嫁をもらったとき、冷静でいられますか？　お嫁さんを心から愛することができるでしょうか？」と問いかけます。

第一巻はほぼ幼児期までで終ります。次の児童期の人間形成を扱ったのが、第二巻「子どもが世界に出会う日」なのです。

2　性質・性格・人格という考え方

小学校に入った子どもは、もうひとりひとりが独特の

個性をもっています。その個性が六年間の児童期に完全に身についてゆきます。三つ子の魂と言いますが、ほぼ五歳前後に、この個性の芽が育ち始めるようです。

ここに、ユーモアのセンスが発達した子どもをあげてみましょう。この子は、父親はアル中で後にはゆき倒れで死んでしまうようなあわれな人間です。母親は芸人で、細腕で二人の子どもを養い愛しますが、やがて心身ともに疲労困憊して精神に異常をきたすに至ります。自分も野良犬のようにやせて、字も読めないあわれな子ども——それが五歳のチャーリー・チャプリンでした。

彼はたった一つ、両親が芸人だったおかげで、物ごころついたころは舞台に登って子役を演じたりして、演技する能力だけを身につけています。あわれな母親をなぐさめるために、懸命に笑わせようと努力する、この努力が、何年もつみ重なったとき、彼は他人を笑わせる才能を完全にマスターしてしまう。つまり彼の演技は、あわれな母を慰めたいという子どもが抱いた願望によって育まれたのです。

これと同じことを、ガンジーは自伝の中で書きます。「あわれな母親を笑わせたいという強いねがいがあった」。ラッセルやモームのように不幸な子どもは、その不幸と闘うためにユーモアの感覚を身につけ、ヒトラーやバーナード・ショーは自己嫌悪感をなだめるために、そして、大言語学者サミュエル・ジョンソンは躁鬱型という病的なはしゃぎのために、ユーモアのセンスに磨きがかかったのです。

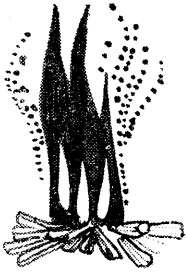
三つ子の魂の例として、幼少年期を暗く不幸な悲惨なうちにすごす夏目金之助を分析します。彼の正義感が、どうしてあれほどよどんだ環境のなかで育ちえたのか。まさにどろ沼に咲き出る蓮の花のような美しさです。これを、養子にやられた塩原家への抵抗——ぼくは塩原の子どもなんかじゃあないぞという自己確認（アイデンティティ）を中心に、母の愛、父の代償となった長兄の存在、などの諸要因によって説得します。

そして次にこの物語の中核になっているエリクソンの漸成理論という人間一生の発達図式を、可能なかぎり易しく説いてゆきます。この図式は今、世界の心理学者が注目しているものですが、専門家でさえ難しい、わかりにくいというものです。これを、伝記に例をとりながら説きあかそうと努めました。

第2章は、「性格はいつごろどうしてできるのか、一度できあがった性格は変えられるものだろうか」という問題を、性格という語には、性質・性格・人格という三つの少しずつ違ったニュアンスをもつ言葉が含まれていることを説きながら、あいかわらず、伝記によって話を進めます。「恥かしがり」という性質を、哲学者ウィリヤム・ジェームズ、ピエール・キュリー、エンリコ・フェルミ、ユング、ワシントン、原敬、寺田寅彦、ネール、エレノア・ルーズベルト、ヘルマン・ヘッセ、ショパン、チャイコフスキーなどの伝記から引いて、それがどのような性格となり人格として表現されるかを分析しています。

そしてここで、性格型（タイプ）の典型として、分裂型と躁鬱型、対人態度の「人に向って・人と対して・人から離れて」の三つの型などや、いつも死にたいという願望を秘めた三人の「強迫的冒険症」の人、E・T・ロレンス、ヘミングウェイ、チャーチルを紹介し、いずれも、母親の冷たさなどが大きな原因になっている点を強調します。

そして最後に、人間にとってもっとも大事な、愛する能力がどのように育つものかを、自己への愛（ナーシシズム）に終始する人と、対象に向けられる愛にまで発展する人とをあげ、伝記のなかで犬好きだった人の例をひいたりしながら、分析をすすめてゆきます。

以上の短い紹介でわかっていただけたかどうか不安ですが、現実の子どもを見る目と伝記資料での具体的な例と、心理学の理論とを、ないまぜながら、一体人間はどこまで自由なのか、教育によって変えられるのか、母親の影響がどんなに大きいか、などの問題に迫ってゆこうと努めました。少しでも人間理解にお役に立つなら、大へん幸いです。

（山梨大学）